

脳梗塞 ～いざというときのために～

平成 28 年 12 月放送

新井 良和

脳卒中（のうそっちゅう）は、脳の血管が詰まって血液が流れなくなる脳梗塞、脳の細い血管が破れて出血する脳出血、脳の動脈にコブ（動脈瘤：どうみゃくりゅう）ができ、それが破れて出血するくも膜下出血（くもまくかしゅっけつ）の 3 つが含まれた総称です。その中で、脳梗塞は脳卒中の 7 割を占めており、今日は脳梗塞についてお話しします。

脳梗塞の症状についてお話しします。まず、会話に注意します。

・ 呂律が回らない、言葉がでない、他人の言うことが理解できないなどです。自分自身で気づくこともあれば、ご家族が、会話がへんだぞ、何を言ってるかわからない、と気づくこともあります。

・ 次に、手足の動きに注意します。半身の手足や顔半分にしびれが起きたり、麻痺がおきたりします。物を落とす、着替えがスムーズにできない、立てない、歩けない、ふらふらするなど普段できていたことができなくなります。

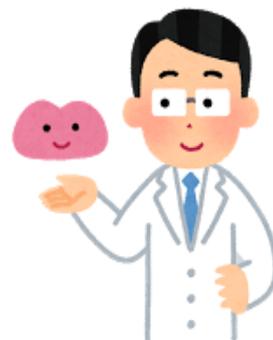
・ 次に、目の症状が出ることもあります。片方の目が突然真っ暗になって見えない、物が 2 つに見える、視野が欠けるなどです。

・ もっと大きな脳血管が詰まると、突然意識がなくなり倒れたり、いびき様呼吸となることもあります。

こうした症状が 1 つだけ出現することもあるれば、いくつかの症状が重なって出現することもあります。またこれらの症状が数分から 1 時間程度で消えてなくなる場合があります。その場合、これは前触れ発作と呼ばれるもので、これを放置した場合、その後脳梗塞を起こす危険性が大変高く、たとえ症状がきえても病院を必ず受診してください。

次に脳梗塞急性期（のうこうそくきゅうせい）の治療についてお話しします。

脳梗塞は早期治療が大切です。先ほどの症状を認めたら、少し安静にして様子を見ようとか、家族が帰ってくるまで待っていようとか考えてはいけません。脳梗塞が起こると、数分後には脳細胞が死にはじめ、時間が経つにつれ病巣が拡大し、後遺症も大きくなります。したがって



症状を認めたら、一刻も早く病院で治療を受けることが必要です。

脳梗塞の治療として、「血栓溶解療法」（けっせんようかいりょうほう）、「血栓回収療法」（けっせんかいしゅうりょうほう）、「脳保護療法」、「抗血栓療法」（こうけっせんりょうほう）などが行われます。このうち特殊な治療法で限られた施設でしかできない、最初の2つについて説明します。「血栓溶解療法」は、t-PA（ティーピーエー）と呼ばれる薬を点滴静注し、脳血管に詰まった血栓（血液の塊）を溶かし、血流を再開させる方法です。「血栓回収療法」は、太ももや腕の太い血管（動脈）から、カテーテルと呼ばれる直径約2mm、長さ1m前後の樹脂製の細い管を、X線を当てながら脳血管の閉塞部まで誘導し、詰まった血栓を直接取り除く最新のカテーテル治療です。どちらの治療法も時間的制約があり、「血栓溶解療法」は、症状出現から4.5時間以内、「血栓回収療法」は、症状出現から8時間以内に行なう必要があります。ただし、これらの治療を開始するには、病院到着後検査や準備が必要で、それに1時間から2時間程度かかります。ですから、血栓溶解療法は症状が出現してから遅くても2時間以内、血栓回収療法は、6時間以内を目安に、可能な限りすみやかに専門医のいる病院に直行してください。この2つの治療法は、二州地区内では市立敦賀病院しか行っていないので、自家用車を使う場合は注意が必要です。救急車の場合は、すでに地区内の救急隊に通知済みです。